

# 現代沖繩人の起源

高宮 広土

## 一 はじめに

日本人の起源を問題とする際、北海道のアイヌおよび南西諸島の人々の起源も常に研究の対象となる（埴原 1997, 1995; 尾本 1996a, b; 宝來 1997; 百々 1993, 1992等）。しかしながら、多くの人類学者が述べているように「日本人」とは一体どのような集団であるのかという疑問に対しての明快な答えはなく、この集団（或いはいかなる人間集団にしてもそうであるが）を厳密に定義することは不可能である。同様に僅か一三〇万人程の現代沖繩人ではあるが、彼らを「現代沖繩人」という一つのカテゴリーで特徴づけることは不可能であり、それ故「現代沖繩人の起源」を探究することも不可能に近い。しかし、敢えてこの問題に取り組む理由は二つある。まず、歴史的な意義であり、沖繩諸島における人口の動態を大まかに復元するためである。次に、沖繩先史時代のケースは「島の先史学」（高宮 1993）としてのヒトの集団と島の環境とのダイナミックなモデルを提供すると考えられるた

めである。更に重要な点は、「島は自然の実験室 (Evans 1973, 1977; Keegan and Diamond 1987; Kirch 1986a, 1980; MacArthur and Wilson 1986; Pianka 1983)」といわれるように、「それらのモデルが「島」のみに利用できるのではなく、過去におけるヒトの行動を理解するうえでの一般的なモデルともなりうるからである(筆者の関心は後者にあることをあらかじめ断っておく)。それゆえ、「現代沖縄人」を定義することは不可能であるが、尾本 (1996a: 130) が日本人を「日本列島のヒト」と定義し、日本人の起源を述べたように、本論でも、現代沖縄人を現在の「南西諸島のヒト」と一応定義し、沖縄諸島の現代沖縄人の起源について論ずる。

人類学という学問が日本に紹介された明治時代以来今日に至るまで、日本人の起源に関しては多くの仮説が提唱されてきた(埴原 1995; 尾本 1996a, b; 溝口 1993)。その中でも、今日最も説得力があると考えられている説が埴原和郎 (Hanihara 1991) による「日本人二重構造モデル」である(尾本 1996b)。すなわち、少なくとも縄文時代には日本列島には原日本人(あるいは縄文タイプ)の人々が生活をしてきたが、弥生時代および古墳時代に、渡来系の集団が大陸から西日本に移住してきた。彼らはそこから、北へ南へと拡散し、原日本人と混血などを繰り返した。しかしながら、北海道アイヌおよび南西諸島の人々はこの新しい集団からの遺伝的影響を余り受けず、現代に至った。そのため、現代の日本列島には、渡来系の人々と縄文系の人々が存在するのである。

上述のシナリオでは現代沖縄人の祖先は原日本人であり、渡来系集団の遺伝的影響を余り受けることなく、現代に至ったことになる。更に述べると、沖縄本島からは人類学では著名な港川人という更新世の化石人骨が出土しており、港川化石人骨は形質人類学的に縄文人と共通する点が多い。そのため、極く最近までは、現代沖縄人の祖先は港川人を含む、この地で生活した更新世人であると考えられていた(今日でも大多数の意見であるようだが)。

しかしながら、筆者は進化生態学のおよび生物地理学的な理論を基に、更新世人あるいは縄文早期・前期人が現代沖縄人の直接の祖先であるという定説化された仮説を否定し、「『縄文後期（＝縄文中期後半～縄文後期を指す）』以降約四〇〇〇年間、沖縄諸島において人口が継続したとすると、現代沖縄人の基礎となるヒトの集団は『縄文後期』に渡ってきた人々であろう（高宮 1997: 36）」という結論に達した。ここで、「『縄文後期』以降約四〇〇〇年間、人口が継続したとすると」と仮定した理由は、縄文晩期～弥生前期および弥生後期～六・七世紀に人口のギャップがありうると思ったからである。本論文では、後者の可能性<sup>\*</sup>について検討し、現代沖縄人の起源について論ずることを目的とするが、まず、バックグラウンドとなる沖縄諸島先史時代の編年および現代沖縄人の起源に関する私論を簡単に紹介する。

## 二 バックグラウンド

沖縄諸島の先史時代における編年はいくつか提案されているが、本論では沖縄考古学会で一般に採用される二編年を紹介する。表1はそれら二編年と北海道を除く本土（内地）、および北海道の編年を対比したものである。表1に見られるように、沖縄先史時代における両編年案は旧石器時代とグスク時代に関しては意見が一致しているが、その間の時代について、一方は内地の編年とマッチさせたものであり、他方は沖縄先史時代の特殊性を考慮した編年となっている（高宮 廣衛 1994; 當眞 1991; 藤本 1998）。沖縄考古学関係者は後者を採用することが多いようであるが、本論では読者が聞きなれているであろうと思われる前者を採用することにする。

さて、表1の編年は旧石器以外の各時代は土器型式などを基にさらに細分されている（例：高宮 廣衛 1994）。

沖 縄		本土(内地)	北 海 道
旧石器時代		旧石器時代	旧石器時代
縄文時代	貝塚時代	縄文時代	縄文時代
		草創期	
早期	早期	早期	早期
前期	早期	前期	前期
中期	早期	中期	中期
後期	前期	後期	後期
晩期	中期	晩期	晩期
弥生～平安 並行期	後期	弥生～平安 時代	続縄文時代 擦文時代
グスク	グスク	鎌倉～江戸	アイヌ文化期

表 1 : 沖縄先史時代の編年

ヌス島等へは、更新世に確実にヒトが移住し生活を営んでいたようである (Spriggs 1996; Terrel et al. 1997; White 1993)。年代に正確性が欠けるが、カリフォルニア沖のチャネル諸島の島も約一万年前にヒトが渡来した可能性があるようである (Earlandson 1991)。これらの島々の特徴はかなりの面積を有しているか、大陸から短距離に位置しているかである。例外はマノス島であるが、この場合、更新世に同島に住んだ人々が、今日のマノス島民の直接の祖先であるという資料は十分でないように思われる。この事実「島」という環境では、ヒトの集団

このような編年を概観すると、沖縄諸島には旧石器時代以降ヒトの集団が継続して生活してきたという印象を受ける。仮に、それが事実とすれば、沖縄諸島は「島の先史学」という見地からすれば、世界的にみて大変珍しい島々ということになる。すなわち、他国あるいは他地域の島々へのヒトの移住・定住の時期を調べてみると、更新世にヒトが生活した痕跡のある島は以外と少ないことに気づく(高宮 1993, 1997, Takamiya 1996, 1997)。例えば、ニュー・ブリテン島、ニュー・アイランド島およびマ

が適応すること、すなわち継続して集団を維持すること、が容易ではないことを示唆している（詳細は高宮 1993, 1997; Cherry 1981; Kirch 1984; Takamiya 1997）。上記の島々と比較して南西諸島の島々の面積は大変狭く、同諸島最大の沖繩本島にしても面積はわずかに約一二〇〇m<sup>2</sup>である。また、これらの島々はステツピング・ストーン状に連なるが、沖繩本島から最短距離の大陸あるいは大島との距離は決して短くはない。このように沖繩先史学の定説は、もし、それが事実とすれば、「島の先史学」に重要なデータを提供することになる。

そこで、高宮 (1997, Takamiya 1996, 1997) は最新の地質学的データ (木村 1991, 1996) および進化生態学・生物地理学の理論 (Kirch 1984; Pianka 1983; MacArthur and Wilson 1967) を基に、沖繩諸島にヒトの集団が適応した時期について検討した。その結果、この地域において更新世にヒトの集団が生活することが可能であった要因は、当時、これらの島々が大陸と結ぶ陸橋の一部であったか、あるいは大きな面積を有した島であったからであるという結論に至った。仮に前者であるとすればヒトの集団は「島」の環境に適応したのではないことになり、後者であるとすれば狩猟採集を生業とするヒトの集団が島で生活するためには、その島はある程度の面積がなければならぬという仮説を支持することになる。更新世末、地球温暖化にともない海進が進み、今日の沖繩諸島の島々が形成される。約一万八〇〇〇年前から一万年前の間の八〇〇〇年間陸地面積が急激に減少するなかで、沖繩更新世人は絶滅したかあるいは移住してしまったのであろう。

完新世になると、縄文早期および前期に沖繩諸島の島々で、ヒトが生活した痕跡はあるが、これらの時代の人々も沖繩という島の環境に適応することが出来なかった。動・植物種が新しい環境に拡散しその環境に適応したとすると、「ロジスティック・カーブ」と呼ばれる人口動態が予測できる (Keegan and Diamond 1987; Kirch 1984)。

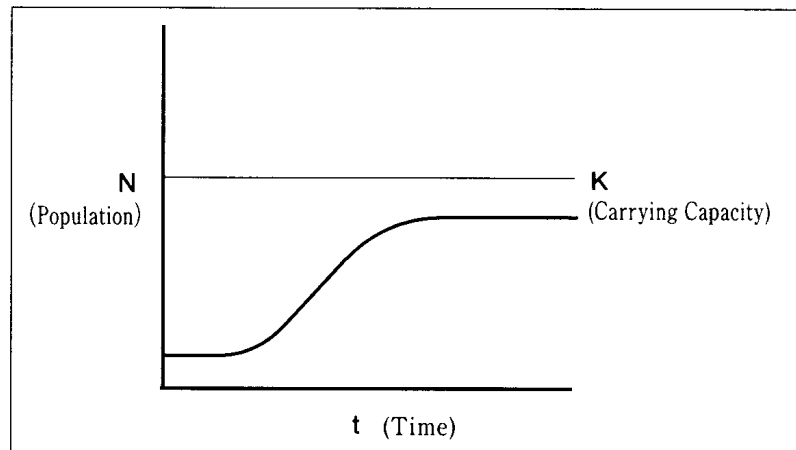


図 1：ロジスティック モデル

すなわち、まずその固体数は急増し、固体数とその環境のキャリーイング・キャパシティーに接近するにつれ、人口増加率が減少し、Sを倒したようなカーブを示すことが知られている(図1)。これはヒトの集団に関しても言えることであり、ヒトの集団が島の環境に適応した場合にも期待できる曲線である(Keegan and Diamond 1987; Kirch 1984)。

遺跡数がある程度古人口を反映すると仮定して、沖縄諸島における人口史を復元したところ、人口の急増は縄文後期であり、その後縄文晩期、弥生・平安並行期に人口増加が減少し、グスク時代になり、再び人口が急増したことが判明した(図2)。

このことは、沖縄諸島でヒトの集団がはじめて島の環境に適応した時期は、縄文後期、おそらく縄文中期の後半から縄文後期であることを意味する。ヒトの集団が沖縄諸島に適応したこの時期を高宮(1993, 1996a, 1997)は『縄文後期』と仮称している。そして、はじめにも記したように、『縄文後期』から継続的にヒトの集団が生活していたのであれば、彼らこそが現代沖縄人の祖先であろうという結論に達した。しかしながら、この四〇〇〇年間にもヒトがいなかったあるいは人口密度の非常に低い時期があった可能性がある。そのうちの 하나가、弥生・平安並行期にみられる。そのなかでも三世紀頃の弥生後期から六・七世紀頃に大きなギャップがあったようである。そのギャップと現代沖縄人の起源について以下に述べる。

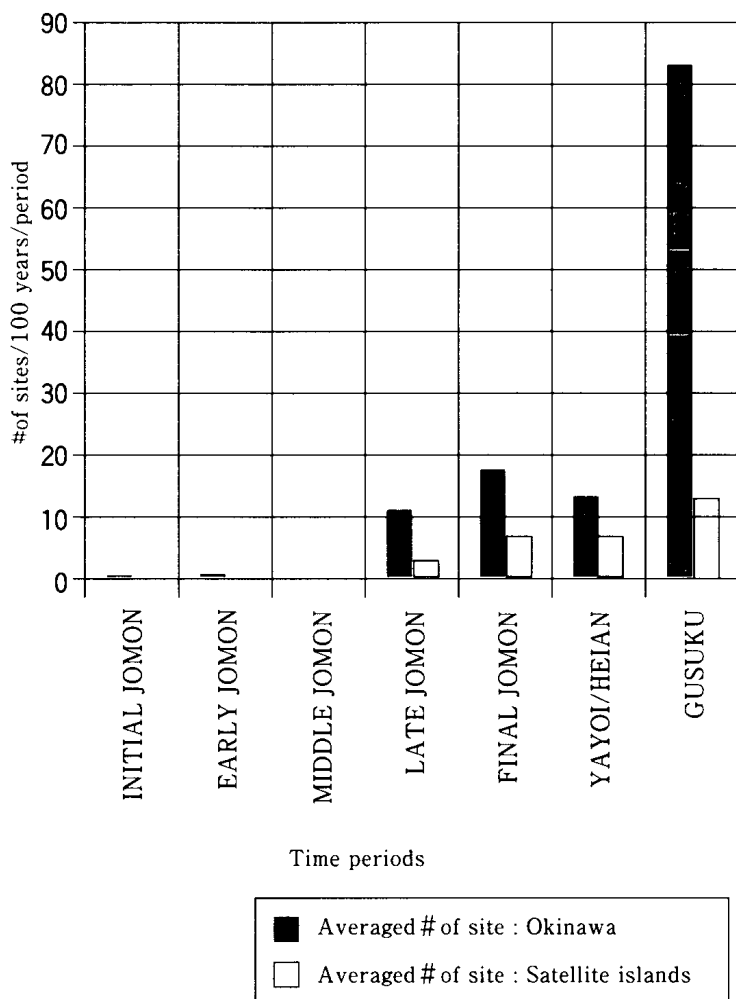


図 2 : 沖縄先史時代における人口の復元

### 三 現代沖縄人の起源について

現代沖縄人の起源について論議する際、まず問題となるのがいわゆるアイヌ・沖縄人同系論である。この説を最初に提唱したのはベルツ（埴原 1995より引用）であるが、より科学的かつ具体的なデータを基にアイヌ・沖縄人同系論を論じた研究者が、埴原和郎をはじめとする九学会の人類学者であった。彼らは形質学的、遺伝学的、お

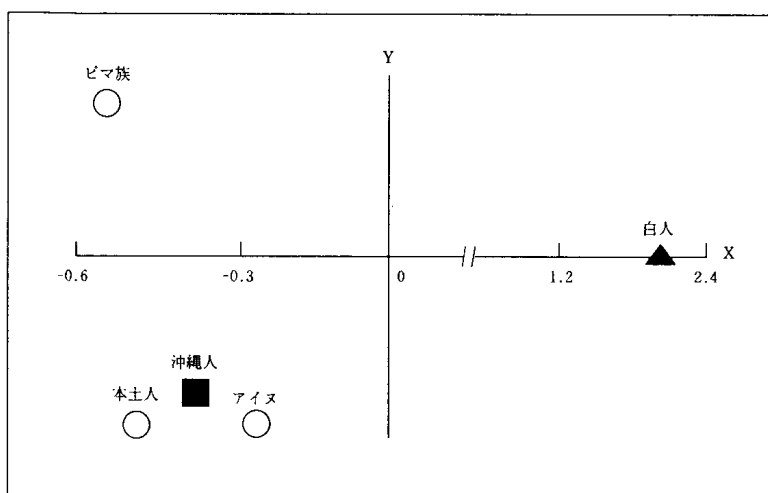


図3：歯冠形質(6種)の出現頻度に基づく分類(埴原1995：53より)

よび生体学的に現代沖縄の集団を調査したが、その結果は埴原の沖縄人に関する第一印象、「私の沖縄訪問はこのときが最初「一九七一年」だったが、空港のロビーにでた私は一瞬自分の目を疑った。『自分はけさ札幌を出发したのに、どうしてここにも大勢のアイヌ系の人達がいるのだろうか?』(埴原 1995:51)」を説明するものとなった。すなわちアイヌと沖縄人は自然人類学的に近い集団であるからである(図3)。更に、その後の自然人類学的研究は、

縄文人がアイヌ・沖縄人のグループに含まれるというデータを蓄積することとなった。また、人類学的な成果のみならず、ヒトと行動をとるイヌ(田名部 1993) やネズミ(米川・森脇 1993)の研究においても、アイヌ・沖縄人同系論と整合性を持つ結果が得られた。アイヌと沖縄人は同系の間集団なのであろうか。

最近になってアイヌ・沖縄人同系論を疑問視する人類学的研究結果が発表されている。その代表的な研究が毛利(1986)および百々(1993, 1992, 近藤 et al. 1997)らによる古人骨の非計測的なアプローチである。このアプローチは「計測では表現できない頭骨の細かい形態異常(しかも無数にある)を巧みに情報として利用(百々 1993:74)」する方法である。百々(1993:76)によると計測的方法是環境に影響を受ける可能性があるが「非計測的な小変異はかなり遺伝的な要因に左右される」らしい。そこで、アイヌ、沖縄諸島人、縄文人、および渡来系弥生人等の頭骨の形態小変異二二項



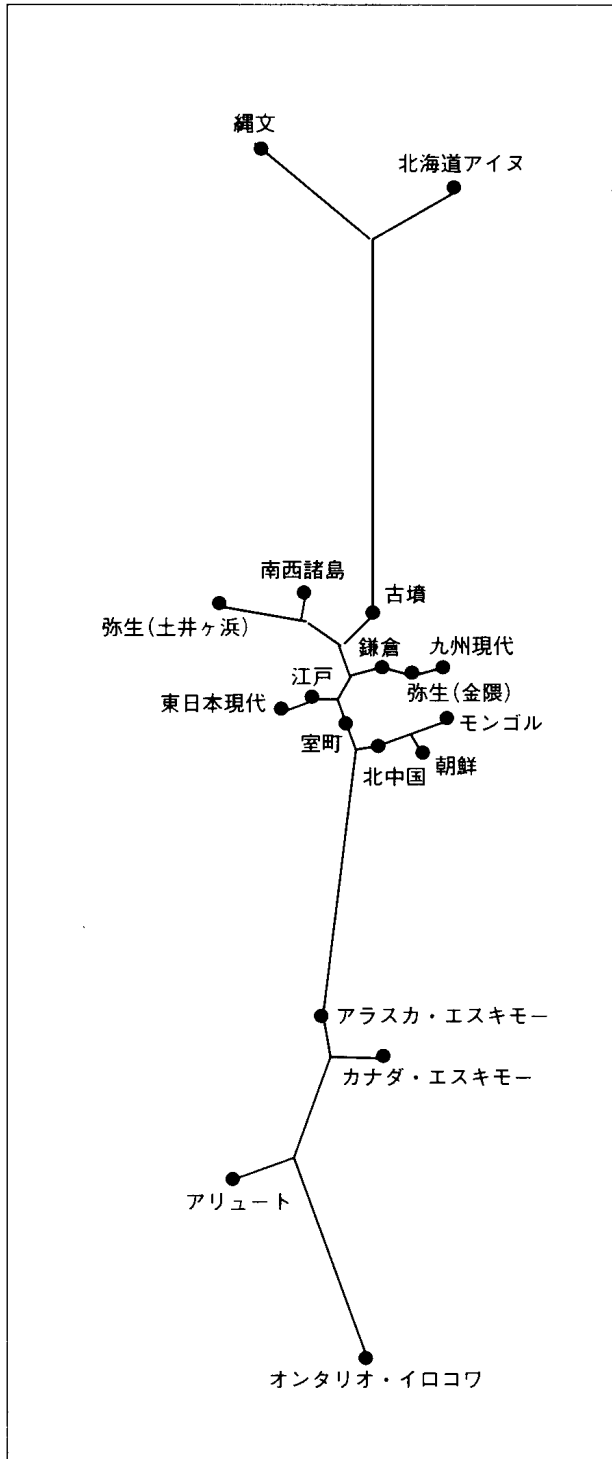


図 4 : 形態小変異による人類集団の類縁図(百々 1993 : 78より)

目を調査し、統計学的に処理したところ、予想外の結果が得られた。すなわち、アイヌと縄文人は遺伝的に近い集団であるが、沖縄諸島人はこれら二集団から遺伝的に離れており、むしろ渡来系弥生人と近い集団である(図4)。

また、ミトコンドリアDNAから日本人の起源を研究している宝来(1997)は、本土日本人、韓国人、アイヌおよび南西諸島人のミトコンドリアDNAの塩基配列を分析した結果、本土日本人と韓国人において塩基配列のタイプを最も多く共有し、アイヌと沖縄の人々は前二集団と共有するタイプは少ないことを示した。このことは前二集団が遺伝的に近く、共通の祖先を持つことを意味する。しかし、後二集団が共通の祖先を持つという結論は得られ

なかった。「アイヌと沖縄の人々は、ともに縄文人の直系の子孫であると考えられているが、共有する塩基配列のタイプが一つも観察されな(宝來 1997:7)」だったのである。宝來は、アイヌと沖縄の人々がたとえ共通の祖先を持ったとしても、これら二集団は少なくとも一万二〇〇〇年前に分岐したであろうと発表している(宝來 1997、研究発表会におけるコメント)。これらの研究は現段階においてアイヌ・沖縄人同系論が一〇〇%正しいとは言えないことを示している。一見矛盾する埴原らの研究結果と百々らの研究結果をうまく説明することはできないのであろうか。この問に関する私見は、後に述べる。

では、一見縄文的なあるいはアイヌ的な現代沖縄人の形質はいつごろ形成されたのであろうか。形質的には沖縄の集団は先史時代人も現代人も均質であると考えられていたが、最近の土肥(1997a, b, 1994, 土肥 et al. 1997)らの研究によると、沖縄諸島の人々は時代的にかんがりの変化があるということが判明しつつある。その中で、最も大きな変化は先史時代人とグスク時代人のギャップである。土肥の言葉を引用すれば、先史時代人は「顔の高さが著しく低く、鼻根部や眼窩の特徴なども基本的には縄文人に似ているが、全体のサイズが小さい点など、縄文人そのものとはいいがたい。顔は相対的に横幅の広い丸顔で縄文人をコンパクトにしたような顔つきという表現が最もふさわしい(土肥 1997b: 4-5)」。更に、沖縄先史時代人の頭型の特徴は短頭型である(土肥 1997b: 4-5)。これら先史時代人の特徴に対して、グスク時代以降のヒトは「全体的に骨格が頑丈になり身長も高くなってくるのである。極端な短頭傾向もほとんど見られなくなり、頭型はむしろ長頭の傾向を示すようになる(土肥 1997b: 6)」。土肥は「まだ十分な資料はないが(1997b: 5)」と断りながらも、大変注目し値するコメントを述べている。まず、一、沖縄の先史時代人とグスク時代人が形質的にかんがり異なる特徴を持ち、これらの違いが「日本における

縄文と弥生以降の違いに匹敵する」程のものであること（土肥 et al. 1997: 9）、および二、「南西諸島の現代人の特徴は、おそらくグスク時代以降に形成された（1997b: 6）」可能性があることである。土肥の形質人類学的データは約一〇〇〇年間で沖縄で生活した人々の形質が急変したことを明らかにしたことになる。なぜこのような変化が起こったのであろうか。

土肥はこの急激な形質的变化を「食性によるもの」、すなわち狩猟採集から農耕への生業の変遷の可能性および「新しい集団の移住」の可能性（土肥 1995 私信による）がありうると考えている。前者に関しては、実際食性の変遷が骨格におよぼす影響が大きなこともある。例えば、江戸から明治にかけての日本人の形質の変化はその好例のひとつであろう。しかしながら、本論では、後者の可能性およびこれを発展した説を検討したい。すなわち、本土における縄文人と弥生人の形質的变化を説明する際にしばしば注目される「置換説」の可能性を検討する。先史時代人とグスク時代人（およびその直接の祖先）は形質的に異なる集団であり、後者により前者が「置き換えられた」あるいは沖縄における人口は前者と比較して後者がメインとなってしまうという可能性である（Hudson 1994 参照）。

言語学的な研究は沖縄先史時代人とグスク時代人の形質学的ギャップを説明する資料となりえそうである。古代日本語と琉球諸語の類似点・共通点について指摘されることがしばしばある。例えば、安本（1991a, b）は東京方言と首里方言を比較した結果、両者が同系であることを説明する。東京方言と首里方言とは、基礎語彙一〇〇語および二〇〇語ではそれぞれ六四語および一二一語一致し、またこれら両方言では東京での *o*（オ）音が首里では *u*（ウ）になるという規則的な対応が見られる。このことは、「古い日本語と首里方言との間に偶然以上の一致が認

められ、両方言が言語学的に近い関係にあることを示している（安本 1991a: 122）。安本は両方言が分岐した時代を約一七〇〇年前と推計している（安本 1991a: 119; 1991b: 198）。また、外間（1986）は服部の言語年代学および彼自身の『おもろ』の研究を通して、沖縄諸方言の成立を八世紀頃とみており、次のような仮説を述べている。琉球語の歴史的发発を二・三世紀―六・七世紀と考え、「今のところ、二・三世紀から六・七世紀頃にかけて、日本祖語から本土に広がってゆく日本語と九州を経て南の島々に渡って行く沖縄語に分岐したのであろう」（外間1986: 95-96）と推測し、「…私は、弥生時代以降の沖縄の文化の古層を、九州から奄美の島々伝いに南下したアマベ（海人部）達による漁撈と稲作文化であるという確信をますます深めている（外間1986: 238）」と結論を述べている。また、最近ではグスクの語源を研究した間宮（1997）もグスク（城）の語源を『古事記』『万葉集』（Ⅱ大和方言）にさかのぼらせて説明した。これらの言語学的アプローチはグスク時代以前に現代沖縄人の祖先となるヒトの集団が沖縄へ移住したことを示唆する。さらに、Hudson（1994）も述べているように、その集団が農耕民であれば、そのころ沖縄にいた「先住民」の集団を「置換」してしまった可能性はありうる。

「置換説」が考えられる要因として、二つの可能性がありうる。まずはHudson（1994）による農耕民による狩猟採集民絶滅説である。Hudson（1994, ハドソン1997）によると、先史時代において農耕民と狩猟採集民がコインタクトした場合、前者が後者を駆逐するケースが少なくないらしい。彼はこのプロセスにより本土における縄文―弥生のヒトの形成を説明するばかりではなく、沖縄に関しても農耕を持った弥生人が南下し、先住民を絶滅させたと考えている。Hudson説は仮説としては大変興味深いが、それを支持するためには沖縄の弥生期の人々のが農耕民（特に水稻農耕民）であったことを示さなければならない。残念ながら、同時期の沖縄の人々は狩猟採集民で

あった。例えば、沖縄県読谷村に所在する高知<sup>たかちくちばる</sup>口原貝塚は典型的な沖縄本島の弥生遺跡であるが、フローテーションを実施した結果、栽培植物は全く検出されず、回収・同定された炭化植物遺体は全て野性植物のものであった(高宮 印刷中a, b, Takamiya 1997)。このため、新集団の移住期に関してはHudsonの説は支持できない\*<sup>2</sup>。

第二の可能性として、沖縄弥生時代における「フード・ストレス」である。沖縄弥生時代人は必要なタンパク源を入手するためにかなり苦労したようである。(高宮 1996a, 印刷中a, Takamiya 1997)。彼らの脊椎動物食摂取システムを検討すると、彼らのメイン・ターゲットであった動物種は、沖縄の環境では最も効率の悪い、不安定な、そしてリスクを伴う動物種であった。また、軟体動物にしても大型の貝を意図的に選択しているが、これらの貝類採捕もやはりコストと危険性を伴う。さらに、筆者は沖縄弥生期に豚がいたとするとそれは大変なコストであると述べたことがあるが(高宮 1996a, Takamiya 1997)、最近の松井(1997)の研究によると沖縄弥生期のイノシシのサンプルの中には豚の骨もあるらしく、実際、豚と同定された動物遺体はイノシシと比較して、かなり巨大なものであった。最後に、「フード・ストレス」緩和法・解決法として、交易というメカニズムが知られているが(eg. Halstead and O'Shea 1989)、沖縄弥生人はこの頃頻繁に九州・西日本弥生人と交易を行っていた。それ故、筆者はこの時代を沖縄先史時代における「フード・ストレス」の時代だと考えている。

筆者は、この「フード・ストレス」を解決するために、沖縄弥生人がコンタクトを通して知識として得たであろう農耕(水稻稲作)を受け入れたと考えた。しかしながら、沖縄の環境では本土の稲作を中心とする農耕に適しておらず、数百年かけて沖縄の気候にあった畑作を六〜一〇世紀に完成させ、それがグスクの農耕へと変遷したという仮説を提唱した(高宮 1996a; Takamiya 1997)。しかしながら、今一つの可能性として、沖縄弥生人はこの「フー

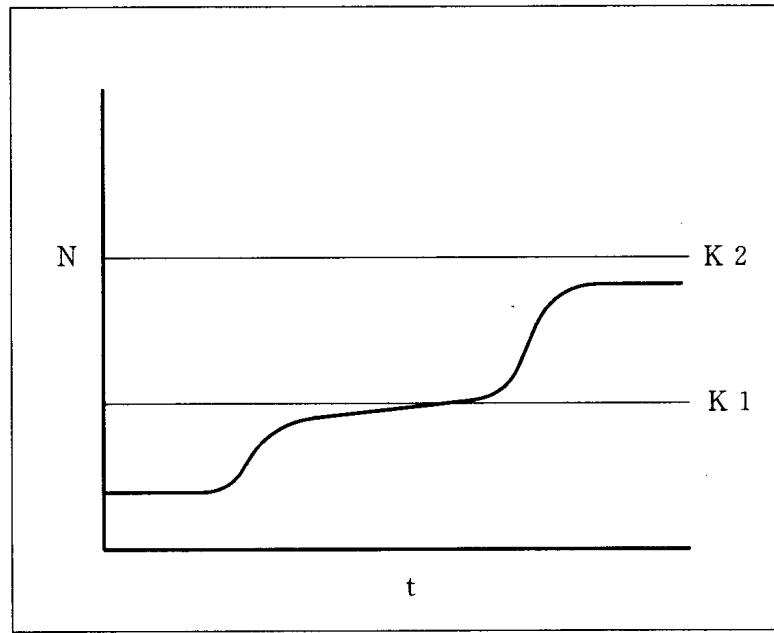


図 5 : ステップ モデル

ド・ストレス」を乗り越えることが出来なかったのではないであろうか。結果として、沖縄本島は再び人口皆無あるいは希薄な島となってしまったのではないであろうか。考古学的にこの時期に関して曖昧な点が多いということは、この頃人口が少なかったとも解釈できる。そして、三六・七世紀に渡来した農耕民によって再び居住されたのではないであろうか。彼らは農耕を生業戦略として持っていたので、一旦沖縄諸島に適応すればその人口はロジスティクに増加したはずである。

ここで、縄文時代→グスク時代における人口曲線について言及する必要がある。筆者はこの時代の人口増をステップモデルによって説明した(高宮 1997, Takamiya 1996, 1997)。ステップモデルとは人口とキャリーング・キャパシティーの相関を説明するモデルの一つで、ヒトの集団が移住し新環境に適応すると、その人口はロジスティクに増加し、そして環境の変化あるいはロジスティク・キャパシティー高くなれば、それに応じて人口は再びロジスティクに増加するというものである(図5)。

沖縄諸島において最初の人口増加が『縄文後期』であり、第二の人口増加はグスク時代にみられ、その要因は八

一〇世紀における農耕の開始（＝新技術）であると考えた（図2）。しかしながら、拙稿でも述べたとおり、約一二〇〇年間という弥生―平安並行期の遺跡数による人口の推定は遺跡数を平均化したことにより、実際の人口のダイナミックスを「隠してしまった」可能性がある（Takamiya 1997）。仮に、本論で論議した説の可能性があれば、『縄文後期』―グスク時代の人口曲線は「クラッシュ」モデルとロジスティクモデルで表現できる。約四〇〇年前に適応した人々は、その後の人口の増加および（おそらく人為的な）環境の悪化のため、フード・ストレスを体験し、弥生中期頃あるいはその直後人口は「クラッシュ」してしまった。弥生後期あたりから六―七世紀にかけて移住してきた農耕民の人口はグスク時代（あるいはその数世紀前）にロジスティク的に急増した。その一方では「先住民」を「置換」してしまった。この農耕を持った人々は南九州の同時代の集団であったのではないだろうか。

ここで前述した埴原らおよび百々らの一見矛盾する研究結果が以下の「仮説」で説明できないかと考えるのである（以下は素人の「仮説」あるいは想像の域を出ないが）。まず、中・近世の沖縄人の骨格の特徴は「サイズと頑丈さをまし、日本本土の中・近世人とあまり変わらなくなる（土肥 1994: 43）」といわれ、実際、Pietrusewsky (1997) による分析では、日本中世人骨の代表的なサンプルである鎌倉人（関東）と沖縄人が大変近いという結果となった。この鎌倉人サンプルは一四世紀とかなり新しい集団であるにもかかわらず、計測的に「縄文人やアイヌにきわめてよく似て（埴原 1995: 291）」いる。ところが百々 (1993) による非計測的にはこの鎌倉人サンプルは渡来系弥生や沖縄人のサンプルに近い。すなわち、鎌倉人は計測的には縄文的であるが、非計測的には渡来系弥生的である。この要因は鎌倉人が「渡来系の人々の遺伝子も少なからず受けていた（埴原 1995: 292）」か

らではないであろうか。このような現象が南九州の古墳時代頃にも起こったのではないであろうか。すなわち、古墳時代に南九州に生活していたハヤトは「遺伝的にも文化的にも縄文系の色彩が濃厚で、渡来系の集団とは大きく違っていた（埴原 1995: 293）」といわれるが、鎌倉人のように、この頃の南九州人は渡来系の人々から全く隔離されていた訳ではない。彼らは鎌倉人のように計測的には縄文的であっても非計測的には渡来系の特徴を持っていたのではないであろうか。さらに、外間（1986）も考えているように彼らはおそらく古代日本語を使用していた。このような集団が、弥生後期（六・七世紀）に農耕とともに沖縄諸島へ南下した。本土において渡来系弥生人の人口が急増したように、沖縄諸島においてもこの新グループの人口は急増し、そしてグスタ時代以降の人間へと変遷していったのではないであろうか。この説では、ヒトの形質的な変化、琉球諸語の成立、および考古学的遺跡の密度が低いことなどの文化現象を説明することが出来る。もし、渡来系弥生人による大陸から本土への移住の要因が大陸における政治的な不安定であれば（松下 1994）、渡来系弥生人あるいはその子孫と接触のあった南九州人が更に南下する可能性は十分にありうるのではないであろうか。以上のように、弥生時代後期（六・七世紀）にかけて今一度ヒトの集団のギャップの可能性を考えてみる必要がある。

世界的なレベルでみると沖縄先史時代の最も重要な点の一つは、このような島に狩猟採集民が約三〇〇〇年間も継続して住み続けたことであった。高宮（1993）でも、述べたとおり、世界的にみて、狩猟採集を生業として集団が生活をした島は、一、日本本州などのように面積の大きな島、二、チャネル諸島のように大陸から短距離に位置している島、三、大型海獣がある程度コンスタントに入手可能な島、あるいは四、一―三の組み合わせである。沖縄諸島の島々はこれらの何れの要素も持ちあわせていない。ただ、『縄文後期』においてヒトが生存するための



珊瑚礁環境の役割は大変重要であった。本論で展開した「ギャップの存在」あるいは「クラッシュ」が事実であるとする、例えタンパク源（特にリーフより入手できた魚類）が豊かな沖繩諸島の環境においても、弥生時代中期に見られるように人々は肉類のフード・ストレスを体験するようになり、狩猟採集を生業として生存することの限界へと達したことになる。今回の仮説が正しいのであれば、沖繩諸島の先史時代の資料は、沖繩諸島のような島では狩猟採集を生業戦略として生存することが難しい（Cherry 1981; Kegan and Diamond 1987）という他地域の「島の先史学」から言われている説を支持することになる。

#### 四 結論

現代沖繩人の起源に関しては、港川人などの更新世の人々がその直接の祖先であるというのが一般的な見解あるいは暗黙の了解である。この説に対し、筆者は『縄文後期人』と現代沖繩人の間に連続性が確認できれば、現代沖繩人の祖先は更新世の人々ではなく、せいぜい約四〇〇〇年前に沖繩へ移住してきた人々であろうという説を提唱した。本論では、ヒトが沖繩諸島に適応したと考えられる『縄文後期』からグスク時代の約三〇〇〇年間における人口の連続性について検討した。形質人類学、言語学、および考古学のデータを概観すると、これらの分野から得られたデータは約四〇〇〇年前から一〇〇〇年前の間に「不連続性」が存在した可能性を示唆するものであった。まず、古人骨学的には先史時代とグスク時代の間に変化があったことが最近の研究で明らかになっている。次に、この「不連続」の時期が古人骨のほとんど知られていない三世紀から七・八世紀であった可能性があることが言語学的な研究成果により示唆されている。すなわち、言語学的には琉球諸言語の基礎ができたこと考えられて

いる時期が三世紀から七・八世紀なのである。さらに、考え方によっては、考古学的資料もこの「不連続性」を支持するものではないであろうか。今問題となっている時期については、先史時代の終末期に近いという事実にもかかわらず、不明瞭な点が多い。この頃の沖繩諸島が無人島とはいわないまでも、かなり人口が少なかったのであれば、考古学的には「不明瞭な」時期となるのではないであろうか。これらのデータを勘案すると、この時期に新しいヒトの集団が移住してきたと考えると形質人類学的、言語学的、および考古学的現象はうまく説明されるように思われる。

この新しいヒトの集団の移住の時期はHudson (1994) が仮説としているように弥生時代<sup>\*2</sup>、あるいは筆者の考えるフード・ストレスの後(三―六・七世紀)の二つの可能性がある。Hudson (1994) は弥生農耕民の沖繩への移住および彼らによる「先住民」の置換説を提唱しているが、沖繩弥生時代は狩猟採集民の時代であったので、この時期における弥生農耕民の渡来はありえない。そうすると、新しい集団の移住は三―六・七世紀頃と考えられる。

今回の仮説は形質学的、言語学的、および考古学的資料を説明するのみならず、沖繩における農耕の起源についての説明ともなりうる。筆者は、沖繩弥生時代のフード・ストレスを考え、沖繩における農耕の起源について次のような説を持っている。沖繩弥生時代人がフード・ストレスを解決のためにいくつかの方法を試みたが、結局狩猟採集という生業戦略では限界に達し、そのため島で生存するために農耕を受け入れたという説である。グスク時代の農耕が雑穀を中心とする畑作であるため、約三―八世紀頃を「水稻農耕から畑作農耕への実験段階」そして八―一〇(あるいは六―一〇世紀)世紀を沖繩における畑作の完成期と理解した(Takamiya 1997)。本論をまとめるにあたり、今一つの説を提案したい。Hudson (1994) の説を基に、フード・ストレスの後、沖繩諸島の人口は激

滅し（あるいは無人島に近い状態）、そこへ農耕技術を持った、長頭・長身で琉球語の祖語となった言語を持った集団が移住してきたという仮説である。彼らは農耕を持っていたため、一旦このシステムが沖繩諸島で機能すれば、本州弥生時代にみられるような人口の急増がありえたとし、実際グスク時代になると人口は激増した。この時期のヒトの集団が上記した三〜六・七世紀の間に、いつごろ定着したかについては現時点においては不明であるが、那<sup>な</sup>崎原遺跡<sup>なざきはら</sup>に近い年代（高宮 1996b; Takamiya In Press）の可能性はありうる。本論で展開した仮説は沖繩人・沖繩文化の起源についていくつかの現象を説明するものであるが、今回提案した説が妥当であるとすると、現代沖繩人の起源はかなり新しい時代となる。

最後に、本論は「沖繩人の起源」という沖繩の「歴史」の枠内のみならず、筆者が常に述べている「島の先史学」としても重要な資料を「島の先史学」に提供する。今回の仮説が正しければ、特別な環境を除いて「島」という環境は狩猟採集という生業では生活が困難な空間であるという他国の島々から得られている結果を支持することになる。

#### 謝辞

土肥 直美博士（琉球大学医学部）および Dr. Mark Hudson（岡山大学文学部）から多くの有意義な情報をいただいた。心から感謝申し上げたい。また、この研究のために「平成九年度 科学研究費重点領域 日本人および日本文化の起源に関する学際的研究」の一部を使用した。約一〇日間という限られた時間で書き上げてしまったため、ハード・データに乏しく、雑文的になってしまったが、多くのご批判・御意見いただければ幸甚である。

## 注

\*1 ここでいう「弥生後期～六・七世紀」は暫定的な時期設定であり、筆者の考える「ギャップ」の期間はこの暫定時期設定より、短期間の可能性あるいは長期間の可能性がありうる。短期間の場合は三～六世紀頃、長期間の場合は三～八・一〇世紀頃か。

\*2 その後、Dr. Hudson (一九九七年二月)と話す機会を持てた。彼は「農耕民」の沖縄への移住時期を沖縄弥生時代と限定しているのではなく、弥生～古墳相当期と考えている。つまり、タイミング的には彼と筆者の意見は矛盾しない。Hudson説に人口密度やフード・ストレスを加味した説が筆者の仮設ということであろうか。

\*3 Pietruszewsky (1997)による計測的アプローチでは鎌倉人と沖縄人は古墳人および渡来系弥生人とグループングされている。今回は時間的な制約もあり、彼の結果を十分に検討できなかったが、今後注目していきたい。

## 参考文献

土肥 直美

1997a 「はしがき」『南西諸島出土人骨の形質人類学的・人類遺伝学的研究 課題番号 07304058』 土肥 直美(編)

page 1. 平成七年度～平成八年度科学研究費補助金(基盤研究B) 研究報告書

1997b 『沖縄地方におけるヒト骨格形質の地域的・時代的変異について 課題番号 06640920』平成六年度～平成八年度科学研究費補助金(基盤研究C) 研究報告書

1994 「ユナガラ人類学のミュージアム 期待大きい琉球列島の発掘調査」『科学朝日』54(10):40-43

土肥 直美、平田 幸男、瑞慶覧 朝盛、泉水 泰

1997 「沖縄地方人骨の形態的変異性」『南西諸島出土人骨の形質人類学的・人類遺伝学的研究 課題番号 07304058』土肥 直美(編) pp.9-10. 平成七年度～平成八年度科学研究費補助金(基盤研究B) 研究報告書

百々 幸雄

1993 「アイヌと琉球人は」『朝日ワン・テーママガジン』14 原日本人(弥生人と縄文人の謎) 14:73-84

1992 「頭骨の非計測的小変異の出現型からみた南西諸島人」『先史モンゴロイド拡散集団の起源・系統 課題番号 03209108』赤澤 威(編) pp.16-25. 平成三年度科学研究費補助金(重点領域先史モンゴロイド) 研究報告書

- 藤本 勉  
 1988 『もう一つの日本文化』 東京大学出版会・東京  
 ハドソン、マーク  
 1997 『農耕を拒んだ縄文人』 『日本人と日本文化 その起源をめぐる News Letter』 2: 19  
 埴原 和郎  
 1997 『日本人の骨とルーツ』 角川書店・東京  
 1995 『日本人の成り立ち』 人文書院・東京  
 宝来 聰  
 1997 『ミトコンドリアDNAからみた日本人の成立』 『南西諸島出土人骨の形質人類学的・人類遺伝学的研究 課題番号 07304058』 土肥 直美 (編) pp.7-8. 平成七年度～平成八年度科学研究費補助金 (基盤研究B) 研究報告書  
 外間 守善  
 1986 『沖縄の歴史と文化』 中公新書・東京  
 木村 政昭  
 1996 『琉球弧の第四期古地理』 『地学雑誌』 105(3): 259-280  
 1991 『音波探査記録からみた琉球弧の第四紀陸橋』 『中川 久夫教授記念地質学論文』 pp.109-117  
 近藤 修、百々 幸雄、土肥 直美  
 1997 『沖縄本島人頭蓋計測値の多変量解析 (予報)』 『南西諸島出土人骨の形質人類学的・人類遺伝学的研究 課題番号 07304058』 土肥 直美 (編) pp.15-22. 平成七年度～平成八年度科学研究費補助金 (基盤研究B) 研究報告書  
 松井 章  
 1997 『具志原貝塚出土の動物依存体』 『伊江島 具志原貝塚発掘調査報告書』 沖縄県教育委員会 (編) pp.159-187. 沖縄県教育委員会・那覇  
 松下 孝幸

- 1994 『日本人と弥生人』 祥伝社・東京
- 溝口 優司
- 1993 「日本人の起源―形質人類学的アプローチ」 『古代の日本 第一巻 古代史総論』 坪井 清足(編) pp.25-52. 角川書店・東京
- 毛利 俊雄
- 1986 『頭蓋骨の非計測形質からみた日本列島諸集団の地理的および時代的変異』 京都大学博士論文
- 尾本 恵一
- 1996a 『分子人類学と日本人の起源』 裳華房・東京
- 1996b 『日本人および日本文化の起源に関する学際的研究』 科学研究補助金「重点領域研究」平成九年度発足重点領域申請書
- 高宮 廣衛
- 1994 『沖縄の先史遺跡と文化』 第一書房・東京
- 高宮 広土
- 印刷中<sup>a</sup> 「弥生〜平安相当期の狩猟・漁撈・採集」 『新沖縄県史』
- 印刷中<sup>b</sup> 「海上の道…再考」 『沖縄研究国際シンポジウムシンドニー大会 世界につなぐ沖縄研究』
- 1997 「ヒトはいつころ沖縄諸島に適応したか」 『南島考古』 16: 27-46
- 1996a 「沖縄諸島における農耕の起源〜沖縄本島を中心に」 『国際日本文化センター叢書 12 日本文化の深層と沖縄』 山折 哲雄(編) pp.117-132. 国際日本文化センター・京都
- 1996b 「古代民族植物学からみた那崎原遺跡の生業」 『那崎原遺跡発掘調査報告書』 那覇市教育委員会・那覇
- 1993 「先史時代の沖縄本島におけるヒトの適応過程」 『古文化談叢』 30 (下): 1089-1107
- 田名部 雄一
- 1993 「日本の系統と伝来」 『日本文化の起源 民族学と遺伝学の対話』 佐々木 高明(編) pp.121-128. 講談社・東京
- 菅原 嗣一

- 1992 「考古遺跡は語る」 『新琉球史 古琉球編』 池宮 正治ら(編) pp.25-61. 琉球新報社：那覇  
安本 美典
- 1991a 『日本語はどのようにつくられたか(第6刷)』 福武書店：東京
- 1991b 『日本人と日本語の起源』 毎日新聞社：東京
- 米川 博通・森脇 和郎
- 1993 「マウスからみた日本人の起源」 『日本文化の起源 民族学と遺伝学の対話』 佐々木 高明(編) pp.137-157. 講談社：東京
- Cherry, John
- 1981 Pattern and Process in the Earliest Colonization of the Mediterranean Islands. *Proceedings of Prehistoric Society* 47:41-68.
- Erlandson, Jon M.
- 1991 Early Marine Adaptations on the Northern Channel Islands. *Hunter-Gatherers of Early Holocene Coastal California*, ed. by J.M.Erlandson and R.H.Colten, pp. 101-111. Institute of Archaeology, University of California, Los Angeles: Los Angeles.
- Evans, J.D.
- 1997 Island Archaeology in the Mediterranean: Problems and Opportunities. *World Archaeology* 9:12-26
- 1973 Islands as Laboratories of Culture Change. *The Explanation of Culture Change: Models in Prehistory*, ed. by C.Renfrew, pp. 517-520. Duckworth: London.
- Hudson, Mark
- 1994 The Linguistic Prehistory of Japan: Some Archaeological Speculations. *Anthropological Science* 102 (3) : 231-255.
- Halstead, P. and J.O'Shea (eds.)
- 1989 *Bad Year Economics*: Cambridge University Press: Cambridge.
- Keegan, William F. and Jared M.Diamond
- 1987 Colonization of Islands by Humans: A Biogeographical Perspective. *Advances in Archaeological Method and Theory*, Vol.10, ed.by M. Schiffer, pp. 49-92. Academic Press: New York.

- Kirch, Patrick V.
- 1986 Introduction: The Archaeology of Island Societies. *Island Societies*, ed. by P.V.Kirch, pp.1-5. Cambridge University Press: Cambridge.
- 1984 *The Evolution of the Polynesian Chiefdoms*. Cambridge University Press: Cambridge.
- 1980 The Archaeological Study of Adaptation: Theoretical and Methodological Issues. *Advances in Archaeological Method and Theory* Vol.3, ed. by M.Schiffer, pp.101-156. Academic Press: New York.
- MacArthur, Robert H. and Edward O.Wilson
- 1986 *The Theory of Island Biogeography*. Princeton University Press: Princeton.
- Pianka, Eric R.
- 1983 *Evolutionary Ecology* (3rd ed.). Harper & Row: New York.
- Pietrusewsky, Michael
- 1997 The People of Ban Chang Early Bronze Site in Northeast Thailand. *Indo-Pacific Prehistory: The Chang Mai Papers* 3:119-147
- Spriggs, Mathew
- 1996 Early Agriculture and What went before in Island Melanesia: Continuity or Intrusion? *The Origins and Spread of Agriculture and Pastoralism in Eurasia*, ed. by David Harris, pp.524-537. Smithsonian Institution Press: Washington D.C.
- Takamiya, Hiroto
- In Press
- Beginning of Agriculture in Okinawa. From the Jomon to Star Carr.
- 1997 *Subsistence Adaptation Processes in the Prehistory of Okinawa*. Ph.D.dissertation. UCLA.
- 1996 Initial Colonization, and Subsistence Adaptation Processes in the Late Prehistory of the Island of Okinawa. *Indo-Pacific Prehistory: The Chang Mai Papers* 2:143-150.
- Terrell, John, Terry Hunt, and Chris Gosden



- 1997 The Dimensions of Social Life in the Pacific. *Current Anthropology* 38:155-195.  
White, Peter J.
- 1993 The First Pacific Islanders. *The First Humans*, ed. by G. Burenhult, page number N/A. Harper Collins Publishers: San Fran  
cisco